モンゴル地域に生きる漢人

―― ウーシン旗に生きる李の物語 ――

オテゲンソブデ

はじめに

内モンゴルは中国の少数民族自治区のひとつである。モンゴル族は全自治区人口の一六%を示す。私の調査したウーシン旗は，人口は約十万人で，その中の三〇%はモンゴル人族である［内蒙古自治区民委，語委2004：1］［郑思忠2007：45］。

ウーシン旗にはモンゴル人が固まって生活しているところがいくつかある。私の調査地はその中の一つである。三年前の二〇〇五年，私はそこで調査をしていた時に，李に出会った。三年間にわたって，毎年二ヶ月程度李と話をし，李の仕事を観察することができた。私が李に興味を持ち始めたのは，彼が陝西省から内モンゴルのウーシン旗に来た漢人であるからである。陝西省からウーシン旗に移り住んだ漢人は数多くいる。李も特別な人でなく，その中の一人にすぎない。漢人として，小さな「モンゴル社会」でどう生きているか，そして現地の人にどう対応されているか，を本論文で描いていく。文化や言語が異なる人々の接触にから生じた出来事を描いていく。そしてモンゴル人が抱く「漢人像」を見ることにする。

第一節　李について

1．子供時代の李

李上明は，一九五〇年冬陝西省榆林県金鶏滩郷に生まれた小柄な男性である。正確な生年月日が自分でも分かりないという。兄弟は五人で，兄二人，姉二人，李は末っ子である。彼は字を読めないし書けない。学校に行ったことはあるが，勉強ができなかったため，読めないし書けないことになった。学校経験を，「学校に行った日にちが少ないが，泣いたことが多い」と語る。彼は小さなころから，小柄で喧嘩に弱かった。学校には，ご飯を食べに行くためだけだったと言う。李が学校に通っていたのは，一九五八年の「大躍進」時代で，当時人々は各自の家でご飯作ることがなく，学校適齢児童を学校に送って，学校でご飯を済ませるようにしていた。李は，ご飯を食べに学校に行くと，いつも同じ年齢の子供にいじめられた。年上の兄がいたので，いじめられるの避けることもできたはずだが，二人の兄は働いていたため，李を庇ってくれる人がいなかった。

李は七歳から一五歳まで村の羊の世話をさせられた。村はの人口は一四〇人で，村の全員が農業を営んで生活を立てていた。世帯ごとに羊二頭から三頭くらいがいる。村の一人が世帯ごとの羊を集めて羊の面倒を見ていた。

2．内モンゴルに来た背景

2.1　生産隊での日々

李は一六歳から一九歳まで生産隊で働いていた。生産隊における仕事は重く，規則は厳しかった。一九六〇年代生産隊を離れることは誰でもできたわけではない。技術者や職人は出稼ぎができたが，一般農民の出稼ぎは認められなかった。技術者や職人の場合でもまず村から出稼ぎの許可を得て，次に郷の許可を受けなければならなかった。

生産隊を離れて出稼ぎに出る場合，一人が毎日生産隊に「副业费」として払う金額は三元だった。そして生産隊がつけてくれる労働点数は一〇点である。一〇点というのは一日一人の生産隊員が得る最高の点数である。年末になると，労働点数によって，生産隊員達にお金が分配されるが，一〇点を〇・二元から〇・元で換算するという。生産が良い年には一〇点を〇・五元で換算するそうだ。李の兄はエセゲイ職人だった。李は兄の弟子として，兄について出稼ぎをすることができた。

2.2　エセゲイ職人

一九六九年，李は一九歳の時，一人の兄に付いて内モンゴル自治区の西部に出て，ウーシン旗を含む地域，

オトグ旗，ハンギン旗で，寧夏の東部でエセゲイを作って歩いていた。寧夏の東部とは，内モンゴルの西部と接触し回族の人が多く，エセゲイを使っていた。徒歩で内モンゴルまで行くには何日もかかる，仕事見つかる日があれば，見つからない日もある。エセゲイ作る仕事は普段二人で行う仕事で，重労働である。毎日一人が平均で五キロの羊毛でエセゲイ一条を作れる。収入はエセゲイ一条に四・五元を得る。生産隊に毎日の三元を支払えば，一・五元が残ることになる。毎日生産隊に支払う三元は安い金額ではなかった。村を離れる当日も同じく三元を支払わなければならない。しかし，出稼ぎに行くことは，生産隊に残るよりは利益が大きかった。生産隊で生産が良いときに，労働点数一〇点を〇・五元で換算するが，生産が良い年はめったになく，〇・二元で計算される場合が多い。一日労働点数一〇点もらえるというのも村にいては少ないことであるという。

2.3　兄の内モンゴルへの定住，エセゲイ職の消失

一九七三年に生産隊が出稼ぎを禁止したてから，李は生産隊に戻った。出稼ぎから戻ってくる人は，出稼ぎにいけなかった人よりお金持ちで，有能な人と見なされていた。そのため，李は一九七四年から一九八一年の間生産隊の副隊長を務めた。李の兄は，生産隊に戻らず逆に家族を内モンゴルに連れてきて，戸籍を内モンゴルに移転することに成功した。それは，李の兄がエセゲイの職人であったことと，現地で人脈を作り上げていたため，トゴルダイガチャから李の兄のような職人を必要としていると申請書を提出したという。申請に対してソムの政府から許可が出て，李の兄家族の内モンゴルへの戸籍移転が認められた。当時李の兄家族の戸籍移転と一緒に申請されたのは大工のシャンだった。彼らはトゴルダイがガチャに来た最初の漢人らである。弟の李の内モンゴルへの戸籍を移転が認められず，李は陝西省に帰った。

一九八一年に農村の請け負う制度が始まり，出稼ぎが自由になり，李はまた出稼ぎに行くことを決めた。しかし，一九八一年，内モンゴルに再び出て来たときに，エセゲイを使う人が既に少なくなり，エセゲイ作りで食べていけなくなったという。

2.4　内モンゴルへの移住

出稼ぎから実家の陝西省に戻った李に，母親の面倒を見る任務が待っていた。李の家族は男三人，女二人の五人兄弟だった。姉二人は結婚し家を出た。二人の兄にも出て行かれたあと，家は貧しくなり李に入る金はなくなった。父が早く亡くなり，兄の一人が内モンゴルに移住してしまい，もう一人の兄も自立して家を出て行ったため，母親の面倒をみる人は李しかいなくなった。母親の世話と貧乏で，李は結婚もできず，母親の病死によって，一人ぼっちになった。

内モンゴルに定住した職人の兄に，息子三人がいる。李は老後のことを考え二番目の甥を養子にもらうことにした。そして，内モンゴルにいる甥のところにきた。

3．内モンゴルでの生活

3.1　李の兄家族

一九六六年，李の兄の一人が内モンゴルにきた。兄は一家でモンゴルに移住して戸籍を内モンゴルに持ってくることができた。兄に五人の子供がいて，二人の娘と三人の息子がいる。二人の娘は結婚して家を出ている。三人の息子は，ウーシン旗に住んでいる。

兄の一番上の息子は漢語の名前を持つシュアンチェンである。内モンゴルに来る前に生まれた。二番目の息子はウランバトルである。ウランバトルとは「赤いヒーロー」を意味するモンゴル語の名前である。生まれた当時，近所のモンゴル人のおばさんに，モンゴルの地域に来たのだから，モンゴル人の名前をつけたら，と勧められて，モンゴル語の名前をつけられた。妹二人にもウランチチグとウランフアという「赤い花」という意味のモンゴル語の名前を付けた。一九六六年代というのは文化大革命が始った時代で，その時代に生まれたモンゴル人の赤ちゃんに「赤い〇〇」とか「ソヤル〇〇」（文化〇〇）という名前が付けられたことが多かった。

兄は，ウランバトルとシュアンチェンをモンゴル語学校に通わせた。当時漢語学校もあったが，政府の政策として，漢人の子供がモンゴル語学校に行ったら有利だったからであるという。シュアンチェンのモンゴル語は上手で，モンゴル人か漢人か区別つかないそうである。ウランバトルはモンゴル語がシュアンチェンほど得意ではないが流暢に話せる。

3.2　養父としての家族への貢献

李はウランバトルを養子にもらった。養父としてウランバトルに家を建て嫁を貰い，同居した。老後を内モンゴルで養子の甥と一緒に住むことに決めた。ウランバトルの結婚にかかった費用は大金で，李は全額を負担した。李が出稼ぎで少しずつ貯めた大事な金である。

嫁は陝西省から来た漢人である。ウランバトルは妻の戸籍を内モンゴルに移転させようと何度も申請したが，トク公社から許可が出なかった。戸籍の移転は厳しく制限されていたからである。一番目の子供が結婚直後に生まれた。出産した女性に対する「計画生育」という政策が厳しく，女性は三ヶ月おきに定期的に身体検査が要求されている。ウランバトルの嫁は，二回目の妊娠がわかったため身体検査を拒否した。妊娠が気づかれたら中絶させられると思ったからである。拒否口実は「戸籍がウーシン旗にないため，ウーシン旗で身体検査を受けることはない」というものだった。

二番目の子供が生まれた。「計画生育政策」によれば，漢人は一番目の子供が健康で，男の子であれば，二番目は生んでいけないことになっている。この規定を破ったため，罰金が課せられた。李は生まれたばかりの赤ちゃんを持って逃走した。とりあげられると思ったからである。故郷の陝西省に逃げた。李は毎日ヤギの乳を絞って赤ちゃんにミルクを与えた。五〇日たったころ，解決したという知らせをうけ，ウーシン旗に戻ってきた。ウランバトルは近くに住むモンゴル人の独身老人の養子に，彼の戸籍を借り息子を登録した。ウランバトルには罰金が課せられ，妻が輸卵管結紮術を受けさせられ，すべてが終わった。そして赤ちゃんは親の元で生活することができた。現在は，小学生になり成績が優秀であると李は言う。もし，あの時私があんなに頑張らなかったら，もう既に死んでいる，と李は言う。李は，孫が小さいころふざけて，言うことを聞かないときに，計画生育の車が来た，と言うとおとなしくなったと笑っていた。

3.3　出稼ぎに出る李

養子家族と同居している李は時々近くに出稼ぎに行く。近所に半牧半農を行うモンゴル人の家族が多く住んでいる。甥家族も半牧半農をやって生活を立てている。家での仕事に人手が足りていて，李はまだ元気なので頻繁に出稼ぎに行くという。

二〇〇五年五月から，李は家から三〇キロ離れたモンゴル人A夫婦の家に出稼ぎに行った。現在の二〇〇八年までずっとAのところで住み込みで働いている。Aのところは，私が李に出会った場所でもある。この三年間にわたって，私は何度も李に話を聞くことができ，彼の仕事を観察し，彼の出稼ぎ先での人々とのかかわりを見てきた。

第二節　李の仕事

二〇〇五年五月から，李はモンゴル人A夫婦のところで住み込みで働くことになった。二〇〇八年現在，Aは七五歳，Aの妻のレンフアは七〇歳である。二人は高齢であるため，農業と牧業を営むのに，人の助けを必要としている。二〇〇五年一一月に李はA夫婦と一年間の仕事契約を結ぶ。

2.1　李の給料の交渉

Aの娘のBは，「両親が人を雇うまでして田舎に住んでも全然儲かってない。彼らの年金なら，町でも不自由に暮らせるがなかなか田舎を離れようとしない。二年前，町で弟が家を作った時に，両親にも二階建ての一軒家を建てたが未だに移れない。いつか寝たきりになったり，動けなくなったらそちらに行くと言う。やっぱり，人とは住み慣れたところをはなれないのか」と言う。

李は二〇〇五年一一月にAと契約を結ぶ。二〇〇五年一一月から二〇〇六年一一月までの一年間の給料は八千元である。二〇〇六年から二〇〇七年の給料は一万元で，二〇〇七年一一月から二〇〇八年一一月までの一年間の給料は一万二千五〇〇元である。

李の給料が年毎に上がった背景には，地域の公務員の給料が上がって，退職者であるAの給料も上がったからである。それに伴って，地域の物価が高くなった。李個人も給料を上げることを強く要求した。レンフアは「うちで働いたくないと言っている。われわれ夫婦年寄りだし，一緒にいるのが楽しくないって。友達が，南のどこかでご飯作る仕事を見つけてくれたとよく言う」という。

A側が給料を上げるまでして李を雇う理由は，李は漢人だから農業の仕事に向いていると考えている。Aに農業ができる畑があるため農業せずにはいかない。A夫婦は，もう農業できる年ではない。誰かを雇うしかないため，少し賃金が高く感じるが仕方がなく李を雇ったと言う。Aには，若くて仕事なしの甥はいるが，漢人ほど農業でできないから雇わないという。昨年，李のおかげで，トウモロコシの生産量は百袋（一袋四〇kg）に達した。李は給料を上げろとレンフアにこう話す。

李：以前お宅で働いていたバダイの給料はあなたの退職金と同じ金額でしょう。私のはあなたの退職金

の半分だよ，私にも自分の給料を全部くれ。

レンフア：いつの時代の話だ，当時私の給料はわずかな七〇元だよ。あなたも一ヶ月給料七〇元でいいの。

李：お宅で働いている建築の人々の中，新入りでさえ一日六〇元から八〇元だよ。私の給料はわずか二二元で，一年間八千元だ。

A：大工さんというのは専門職だろう。誰にもできる仕事じゃない。彼らの仕事には時期があって，仕事できるのはこの何ヶ月間だよ。秋から冬にかけてまた仕事がなくなるのよ。うちはあなたを長期雇っているでしょう。春の子羊が生まれる季節と秋の収穫の時期以外，うちは暇だよ。一年間通してあなたを毎日六〇元で雇う人がいると思うか。あなたも私の後を追って来ている立派な年寄りだよ。

Aはこう言いながらも，李の賃金を毎年上げてやっている。李も他のところに移ろうとしない。李は，私に「うちの息子（養子のウランバトル）に，Aのところにいろと言われた。他のところに行ったら騙され給料さえもらえないかもしれない」という。

Aは「李が農業の仕事に向いている。近所で彼に勝るものはいない。李は人がいない独りのとき良く働く。誰かがいれば話して良く働かない。話が好きだからね。でも基本的にまじめだよ。それに，子供らに賃金を上げて李を雇えといわれたから」と言う。

2.2　李の一日の仕事

朝一番早起きするのがAの妻のレンフアである。レンフアは六時に起きる。二月の内モンゴルの朝は，気温が低く，室内の気温は三度くらいである。レンフアが起きて，火をおこし，お茶をいれる。焜炉から伝わってくる暖かい空気が室内の温度を変え，未だ布団にいる人を眠りに誘う。レンフアのミルクティの香りが漂い，Aは起きる時だと感じて体を起こして，布団を畳む。A顔を洗い，テーブルに着き，レンフアが朝食をテーブルに運んでいるところへ，李が入ってくる。

朝の挨拶はしない。最初の会話は，李が，昨夜子羊が生まれたか，とA夫婦に聞く。Aのところは，今年は例年よりやや早く二月末に子羊が生まれることとなった。子羊が昼間だけでなく夜にも生まれるため，夜中にも一回か二回起きて，羊囲いを巡回しなければいけないのである。二月の内モンゴルはまだ寒く，生まれたばかりの子羊は寒さに耐えられず凍死する場合もある。昨年，新しい羊囲い用の温室ができて，今年凍死することはなくなったが，風邪を引いたり，あるいは生まれたばかりの子羊が母親羊に嫌われて無視されたりする場合もあるため，人が面倒見る必要がある。李はたまに巡回するが，巡回に行くのはほとんどレンフアである。

朝の食事が終わったら，外に出かける。八時ごろで出かける。三人で，家の外で羊や牛にえさをやる。秋収穫したトウモロコシを，出産を迎えている羊にやる。乾燥させたトウモロコシの葉っぱを牛にやる。家畜が餌を食べ終わったら，私有地に送る。羊は家の周りの私有地に送るが，牛を二，三キロの遠いところにある私有地に送る。Aは，毎朝牛を送るのが仕事だが，距離が遠いため，たまに李が牛を送る。

牛を送る時に，A夫婦は李の焦りに苛立つ。牛を送る前に，牛に水をやる。牛という動物は生まれつき性格が遅く，井戸に行かせても，思うようにすぐに飲んでくれない。飲んで，休んで，また飲む。しかし，李は牛の「ぐずぐず」することを待っていられない。井戸に行かせるのが仕事だが，飲むか飲まないか牛の自由にまかせて，井戸に行かせたらすぐに追い出す。牛に十分な水をやってない，とAは不満を表す。

家畜に餌と水をやり終わったら，外の仕事は一応終わる。李は農業の作業を行う。羊囲いから冬中にたまった羊糞を田畑に出す。羊や牛の糞は，大事な肥料になる。レンフアは，家に戻って，朝食の皿を洗い，家の掃除をする。一〇時ごろに，牛を追ったAが家に帰ってきて，お茶を飲む。その後，オンドルに上がって，読書する。李が入ってきて，お茶を飲みながら休憩を取り，お昼の昼食を何にするのかレンフアと相談する。一〇時半ごろ，レンフアか李が昼食の支度をする。一一時半ごろから，ご飯食べて，一二時から二時半まで昼寝をする。二時半ごろから，李は乾燥した家畜糞を出す。レンフアは，出産したばかりの羊に水や餌を与え，子羊にミルクをやる。五時から夕飯の支度をする。夕飯後七時から三人でテレビの中央ニュースをみる。八時頃にA夫婦は寝る。早寝である。李は家庭ドラマを見る。

2.3　李が苦手な羊探し

A夫婦は，朝起きたら家畜の世話をする。八〇頭の羊，二〇頭の牛がいた。二月であるため，農業の仕事はまだまだ始まらず，李は家畜の仕事の手伝いをしていた。レンフアは，漢人が家畜の仕事が苦手であると言っていた。Aが住んでいる地域は草原ではなく，砂

漠や高原で，沙柳という植物が多い。こうした地域に，ウサギが多く住んでいて，冬になると金に困った人たちはウサギを捕まえるために，たくさんの網をつけておく。Aの羊は，時々その網に落ちて，家に帰ってこなくなったりする。いなくなった羊を探しに李を行かせるが，ほとんど見つからずに戻るという。最終的には，レンフアが探しに行って見つけて来る。レンフアは，漢人は跡を追う習慣がないらしく，羊と羊の足跡の区別つかないからいつも見つからないと言う。

レンフア：二回も数えたけど，羊は七九頭のようで，一匹足りないみたいね。

李：私が数える。五，一〇，一五，あや，や（羊はじっとせず，羊小屋のなかに走りまわる）逃げちゃった。

レンフア：ああ，あっ，考えたらわかることだし，私たち二人にはできる（羊を数えること）わけがないよね，夫を呼んできてくれ。

李がAを呼んできた。

レンフア：羊が一匹足りないみたいだけど，あんたが数えてくれる。李を怖がっていて羊がじっとしてくれない。

A：（羊）興奮しているね。うちの羊は元気だね，あんなに跳んだり走ったりしているのを見て。ねー，（李に向かってジェスチャで）そこに立って羊をあっちに行かせないで，ここに立っていろ。私が数える。五，八，一〇，一五，二〇，…，七九匹だ。もう一回，七九匹だ，一匹足りない。

李：おかしいね，どこにいるだろう。羊を集めたときよく見たよ。今日羊は自分で来なかったので私が集めに行った。

レンフア：またウサギの網に落ちたのだろう。ウサギ取る人って本当に責任がないね，勝手の人に土地に入って網をつけるって。

李：昨日ペルジの息子さんが手に二匹のウサギを持って歩いていたよ。

李が羊を探しに行った。三時間後に疲れそうな顔をして帰ってきた。

李：いない，いない，三回もまわった。死んでいるかも。

レンフア：いないわけがない，死んでも死体があるでしょう，私が行くわ。

李：誰が行ったって同じだよ。

レンフアが探しに行った。二時間後に，羊と手にウサギ取り用の網を持って帰ってきた。

李：いたの，おかしいね。

レンフア：あなたの足跡を見たよ，同じところをぐるぐる回ってね，そこから一〇メートル先の沙柳のしたにいたわ。まったく

李：へえへえ（笑い），やはり「マウヒタド」（モンゴル語，「悪い漢人」）だね。

2.4　李が好きなロバ

レンフアは，なぜ李が家畜を乱暴に扱うのかと疑問をあらわす。家畜に対して愛情はない。家畜を蹴ったり，太い棒で叩いたりする。レンフアは，あんなに太い棒で叩いたら，羊の腰が折れちゃうよ，と文句を言う。

李は，飼っているロバを大事にしている。いつも水や餌をやり，散歩に連れて行く。A夫婦にとって，ロバは運送に使われ，食べるのもウマより少なく，羊とも一緒に放牧できる便利な動物だが，ウマほど気に入らないのである。ロバはどこかで滑稽で，頑固が性格を持つ。声も高く，耳も長く，見た目は悪いという。

李がロバに優しいことが，隣人がロバを借りに来る時に現れる。現在では，近所の人のほとんどが車やオートバイクを交通の手段にして，もの運びなどは小型トラックに頼っている。Aは年寄りなので，今でもロバを飼っている。自動車に替えた人々が，道路ができてないところにもの運びに行く時や，あるいは春になって水が溢れて小型トラックが渡れないようになる場合，Aにロバがあることを隣人たちは思い出す。

隣のペルジはロバを飼ってない。ロバを一日貸してと言って，借りて行った。レンフアは，「ノー」と言わない人である。ペルジは，二日たっても返してくれないので，李はペルジに文句を言う。「ペルジは，お金借りても返してくれない人だよ。例年，お金を貸したが返してくれない，返すようにやさしく言ったら金がないという，強く言ったら怒り出す，困ったものだ」と李は言う。

次の日，ペルジの奥さんがロバを返しにきた。黄砂で一日仕事できなかったので，返す日が遅れたという。李はすぐにロバにえさをやった。ロバは餌を食べなかった。李は，ペルジがロバを使いすぎたから食べないのだと言う。レンフアは，李が以前ペルジと喧嘩したことがあるから恨んでいるのではないか，明日になればロバはきっと大丈夫になるでしょう，と言う。

モンゴル人の家畜は，基本的に五種類ある。牛，馬，ラクダ，羊，ヤギ，である。モンゴル人はウマが大好きである。それは，ウマをモンゴルの文化の一部と見

ているからである。ウマは騎乗用に使われ，運送に使わない。働かせるより，ペットや飾りである。人間の仲間でもある。感情があって，生まれた家を忘れず，売られても，逃げ出して生まれた家に戻ってくる，という話がよくある。祭りに，ウマの競争があるが，ロバの競争はないのである。

モンゴル人はウマが好きにもかかわらず，ウーシン旗においてはウマの数が減りつつある。逆に，ロバの数が増加している。例えば，一九五五年に，ウーシン旗におけるウマの数は二九五〇頭，ロバの数は三〇〇であった。二〇〇六年までのこの五〇年の間に，ウマの数は一八七九頭まで減り，ロバの数は一五七四頭に増加した。それは，ウーシン旗に入ってきた漢人の増加に伴って起こった現象であると考えられる。

ウーシン旗における馬とロバの頭数の変化

	ウマ	ロバ
1955年	2,950	300
1971年	2,812	1,231
2006年	1,879	1,574

1955年と1971年のデータは「中国・少数民族地域の統計資料をよむ」により
2006年のデータは「ウーシン旗2006年国民経済統計資料」2007年　ウーシン旗統計局印刷による。

2.5　李の別収入

A夫婦と李が昼寝をするが，いつも昼寝の邪魔をされる場合が多い。溜まった家畜の骨や段ボールや鉄を収集するリサイクルの人が入ってくる。中国南の河南省の人で，話している言葉は通じにくい漢語の方言である。六〇歳代の男性と二〇歳代の男性二人である。鉄は一キロあたり一・二元で買い取る。A夫婦が売った鉄条網重と家畜の骨や段ボールで二〇元くらいもらったが，李は鉄棒を売って七〇元を受け取った。李は，近くにある最近環境汚染で閉鎖された鉄工場から，毎回牛を追ってからの帰り道で鉄棒を収集するそうである。

電卓を使わず人々は暗算する。買取業者に釣銭が足らなくなり，買取業者が，Aと李におつりを渡す時に，一人に二人分のお釣りを渡し，Aと李とが各自で分けるように指示する。A夫婦は七〇歳過ぎの年寄り夫婦で，どっちがどれだけの釣銭なのかよくわからないが，李は暗算が得意である。

2.6　李の商売参加

李の親戚と知人も訪れてくる。声が大きく，タバコを休まずに吸う。A夫婦から，牛を買いたいという。牛を見て，値段を出す。春という時期には，家畜の体力が落ちやせるのが一般的である。秋になると牛が太り，元気になり，また人々が冬の肉を準備するため，牛肉が高くなる。そのため，牛を安く買えない。彼らが春の時期に牛を安く買って，秋まで待って売るか，あるいは，今すぐに場所を移って買った牛を売り出すのが目的である。差額を狙っている。

二歳になる黒色の牛を買いたいと買い手はいう。幾らで売りたいのかとレンフアに聞く。レンフアは，幾らで買いたいのかと聞き返す。李と買い手二人との三人が指を襟の中に隠し，言葉を使わずに値段を相談する。相談の結果，一八〇〇元という値段を出した。A夫婦は，安すぎるという。二〇〇〇元という。一八五〇元は出せる最高の金額だ，これ以上は無理だと買い手は言う。レンフアは，二〇〇〇元以下では売れないと言う。最後に買い手が一九〇〇元と言ったが，レンフアが不同意のため，買い手は帰った。

二日後に，買い手はまた戻ってきた。牛を買いたいという。小型トラックに三頭の牛を積んでいた。買い手の言い分は，どうせ商売しているからトラックを満タンにして帰りたい，移動するのにガソリン代もかかるし，今ガソリン代も高くなっているし，牛を売ってほしい，と言う。Aは，トラックに運んでいる牛を見て，誰のから買ったのかを尋ねた。バヤンから買ったという。Aは，レンファに向かって，顔色が悪い牛だね，病気でしょう，バヤンは彼らを騙すくらいは簡単だよ，と言った。バヤンは，近くの隣人で知り合いである。彼らは，以前話した牛ではなく，その牛よりもっと体の小さな，黒と白の混じった色の二歳の牛を買いたいという。同じように彼らと李の三人が手を隠して値段を決め，一二〇〇元と値を出した。交渉の結果一五〇〇元で売った。A夫婦は，牛の数が増えて早く処分したい，または今年一〇月に五頭の子牛が生まれる予定である。黒白の牛は，生まれつき体が小さい，彼の母牛も姉牛も皆小さな体だ，だから体が大きくならないのだ，と言う。

レンフアは，売った牛の尾から，一センチの毛を切り取って残した。自分の手で育てた牛を手放すのが辛そうである。買い手が帰ったあと，李とA夫婦はテーブルを囲んでお茶を飲む。李は，買い手はあの値段でさほど儲かってないよ，せいぜい五〇元儲かったらたいしたものだと思えばいいと言う。Aは，五〇元儲かるなら商売やる意味があるのか，家で休んだほうが良いのではないかと言う。

李は，牛を買う側である親戚と牛を売る側の雇い主のA夫婦の間に入っている。まず李が，A夫婦が牛を飼っている情報を親戚に与えただろう，とレンフアは言う。そして，牛の値段を決める時に，親戚の人と李が隠して手やりで相談する。隠して手やりで値段を相談するのは，李と親戚のグループ対A夫婦のように見えていた。取引が成立して李の親戚が帰った後，李が，彼らが儲かってない，とAに言う。そう言う意図が分からない。

第三節　李のモンゴル語

3.1　モンゴル語の能力

言語能力の測定に，能力検定試験が良く使われる。試験参加には，読み書きできることが基本である。漢語とモンゴル語の読み書きができない李のモンゴル語の能力は，話すと聞くに限られる。

李はA夫婦のモンゴル語が聞き取れる。A夫婦による仕事へ出された指示を正確に受け取る。それは，李がモンゴル語をある程度理解できるほかに，二，三年間にわたって一緒に仕事したことによる慣れや，相手の表情，アイコンタクト，姿勢，動作など非言語表現を受け取って相手の意味を推測していると考えられる。しかし，すべてのモンゴル語話者の言葉を理解できるわけでもない。モンゴル語標準語話者であるAの婿のモンゴル語がまったく理解できないのである。読み書きができない李の頭には文字が存在しないのである。「音の世界」にしか生きていない李が毎日聞いている音はモンゴル語の方言の一つであるオルドスモンゴル語の「音」である。標準語の「音」が理解できないのである。

李のモンゴル語を話す能力に関して言えば，片言のモンゴル語しか話せない。文章を作れない。李が知っている単語を分析してみれば，羊，ヤギ，牛などの家畜の名前，一から十までの数字，木や草を含む植物の名をモンゴル語で言える。そして，「マゴウ」（悪い）「ニグレウゲイ」（あつかましい）「ホラガイチ」（泥棒）「テネグ」（馬鹿）などネガティブなイメージを持つ言葉を数多く知っている。

3.2　モンゴル人にモンゴル語を教える李

フフホト市で公務員の仕事をしているAの息子エンヘ（四七歳）が実家に遊びに来た。エンヘは李と一緒に雑草を取り除く作業をしていた時，ズボンに付いた雑草の実を指して「ウルゲス」（棘）と言った。雑草の実を取り外すのに手伝っていた李は「違うよ，モンゴル語でジャンゴ」（棘が付いた雑草の一種類）と言うのだと直した。

仕事や家庭でモンゴル語がほとんど使わらない漢語世界に生きているエンヘが，実家に戻って普段見なれない植物に出会って一瞬間モンゴル語の名前を思い出せなくなった。それに比べれば，李にとって「ジャンゴ」は日常的に出会う身近な存在だった。モンゴル人が多く住む地域で仕事をしていると，モンゴル語の「ジャンゴ」も自然に頭に入って来るようになっていた。

モンゴル人のモンゴル語を直すということは，李のモンゴル語は如何に上手からというよりむしろ，モンゴル語がモンゴル人に如何に早く忘れ去られているのかということを示している。

3.3　コミュニケーション

モンゴル語を母語とする李の雇い主A夫婦は，李にモンゴル語で話しかけ，返事が漢語で返ってくる。場合によっては，A夫婦は漢語に切り替えたりすることもある。

李は片言のモンゴル語を話せるが，モンゴル語より漢語を使うほうが多い。A夫婦は片言の漢語を話せる。李自らモンゴル語で話そうしないのは，話し相手のA夫婦の漢語能力が，李のモンゴル語能力よりレベル高いからだと思われる。Aは，モンゴル語または漢語による読み書きができる。

普段三人がお互いに自分の母語をしゃべっている。李は漢語を話し，A夫婦はモンゴル語を話していた。李はいつもA夫婦の会話に積極的に参加する。モンゴル語によるA夫婦の会話を，李は理解し自分の意見や同じ話題の出来事を漢語で話す。普段テーブルを囲んでご飯を食べている時に，三人で話すことが多い。彼らは，近所の人々の話か，子供の話，昔の出来事や，そろそろ始めようとする農業の話，どんどん値上がりしている物価，などについて話す。共通の知り合い，共通のニュース，共通の食事，を話題に持っている。

李が話す漢語をAは時々聞き取れない場合，Aの奥さんが漢語をモンゴル語に訳す。李は，Aの耳が遠いため聞こえなかったと思い，より高い声で話すが，力入れすぎてつばを飛ばしてしまう。Aは李の声を高くしてくれたことに感謝せず，つばを飛ばしご飯に入れたことを気にする。Aは自分の耳が遠くなったことを認めたくないことと，使用人の李に耳のことで同情されたくないようである。

夕方七時から放送される漢語でのニュースを三人揃ってみる。三〇分間のニュースの放送が終わると，Aはモンゴル語のチャネルに変える。李は，席を立って自分の部屋に戻る。オルドスモンゴル語の一部分しか聞き取れない李にとって，モンゴル語の標準語で放送されるテレビ番組が面白くないのである。夜八時半頃に，李は再び戻って来て，寝ているAの手からリモコンを取り，テレビのチャネルを漢語チャネル変え家庭ドラマを楽しむ。

3.4　ジェスチャーに勝るものはない

A夫婦の漢語は日常レベルの程度のものである。A夫婦にも漢語で言い表せないものがたくさんある。あるとき，A夫婦が外出するときに，一頭の牛の体調が悪かった。A夫婦は李に，牛の様子を見るように言った。外から戻ってきたA夫婦は，牛の様子を知りたかった。特にAは牛が反芻したかどうかを聞きたかった。しかし，漢語で反芻という言葉を言えない。モンゴル語で反芻という言葉を言っても李が分からない。Aは舌，顎を使って牛の反芻するときの様子の真似をした。李がやっと分かってふっと笑った。Aは，馬鹿漢人，と小さくつぶやいた。

3.5　「泥棒」くらいのモンゴル語が分かる

李は，従兄と兄と三人で，モンゴルの地域を歩き回っていて，暗くなった。あるモンゴル人の家を訪ねて，宿を頼んだ。泊まらせてくれとの頼みに対して，モンゴル人女性は，良さそうな態度を見せてくれた。主人は未亡人であった。三人が家に入ったところ，もう一人の漢人が座っていた。座っていた漢人が，入ってきた三人を見て，未亡人に向かってモンゴル語で「ホラガイチ，バイナ」（泥棒だ）と言った。それを聞いたモンゴル人の女主人は，泊まることを拒否した。仕方がなくモンゴル人の家を出た。李は，兄に「行こう，他の泊まるところを探そう，さっきの漢人は，われわれを泥棒だとモンゴル語で言ったから，泊まらせてくれないのも無理がない」と言った。李の従兄は，李に何回も聞き返した。「聞き間違ったのではないのか，本当に我々を泥棒だとモンゴル語で言ったのか」と。李は，「ホラガイチ，バイナ」と言っていた，それは泥棒の意味だよ，と説明した。李の兄は気の強い人で，さっきの家に戻って，その漢人を殴った。

3.6　評価

学校で語学を習う人と違い，李は自然に習った外国語であるモンゴル語を広く応用できている。李の状況は，義務つけられた外国語を何年間勉強しても，本場の外国語を聞き取れずに苦労することとはまったく違う。彼に語彙や文法の能力がないが，音声言語に慣れている。彼にとって文字とは何の意味のない線と点のつながりである。

雇い主のAの使用言語がモンゴル語なのに対し，李の使用言語は漢語であった。李が把握しているモンゴル語の語彙はネガティブな言葉に偏る。それは李がモンゴルの地域で出稼ぎを行っていたときに，悪い言葉をよく耳にしていたからだと考えられる。

モンゴル語の衰退も見えている。モンゴル人自身がモンゴル語を忘れている。出稼ぎで来ている漢人のモンゴル語の能力も低くなっている。李のような高年齢の出稼ぎの人はモンゴル語を理解できる。二〇歳代から三〇歳代の出稼ぎに来る漢人は，モンゴル語がまったく分からない。その代わりに，モンゴル人の漢語の能力が高くなり，出稼ぎ漢人とのコミュニケーションは漢語によって行われるようになった。その背景には，モンゴル人が主に住む地域でも，モンゴル語の能力なしでも十分仕事していけるようになったということがある。

言語と文化が異なっているが，自由なコミュニケーションが行われている。言語以外にジェスチャーを使って自分を表現していた。けれども，一般的には，遊牧民にとって漢人は人気がなく，漢人をあつかましいとか泥棒とか思うモンゴル人が多いようである。

第四節　結　論

4.1　ヒタドという言葉

「ヒタド」という呼び名には，嫌悪感がやや含まれている。「ヒタド」は普通に漢人を指すに使われているモンゴル語だが，「ヒタド」イコール漢人ではない。その意味は，漢人プラスアルファだ。つまり，飾られた漢人である。形容詞として使われる時の「ヒタド」には，こうしたニュアンスが含まれていないが，ヒタドの多数形を表す「ヒタドオッド」にはマイナスな一面が入っている。そうなった原因は，最初に「ヒタド」と呼ばれた人々が，モンゴル人側から尊敬されていなかったためだと考えられる。

ウーシン旗に入って来た最初のヒタドは，商人や農民だった。ヒタド商人はモンゴル貴族に高金利の金を貸し，金を返せなくなると土地を取り上げた。ヒタド商人とモンゴル貴族のせいで土地を奪われたモンゴル

人にとって，ヒタド商人は悪徳商人でしかなかった。商人は，取り上げた土地に大量なヒタド農民を呼び寄せ，農業をやらせた。

清朝時代，長城より北の地域を開墾する令状が出されたあと，ヒタド農民は，ウーシン旗に来て春に種を蒔き，秋の収穫が終わったら故郷に戻っていた。しかし，時間が経つにつれ，帰らなくなり，定住した。借りた土地に永住するヒタド農民に，モンゴル人は恨みを感じた。

悪徳ヒタド商人と定住した農民以外に現れたヒタドは，「エグレゲ　ベン　エグレッセン　ヒタド」（布団を巻いて背負った漢人）「シバルチン　ヒタド」（裸足で泥を踏む漢人）「ラーハイチ　ヒタド」（被害をもたらす漢人）「レグン　ヒタド」（出稼ぎ漢人）などである。彼らは，モンゴル人が頻繁に出会う人々であり，モンゴル人の目に見える漢人像を作る人々でもある。モンゴル人がやろうとしないエセゲイ作りや部屋作りをヒタトがやってくれる。

言葉はその時代の状況を反映するものである。布団を巻いたヒタドと裸足で泥を踏む漢人は既にいなくなり，彼らを指すために生まれた言葉もさほど使われなくなっている。しかし，「ラハイチヒタド」と「レグンヒタド」はまだ使われている。歴史の流れで見れば，ヒタドと呼ばれる人々は，モンゴル人を苦しめ続けた。その結果，ヒタドという単純な名詞に，漢人に対するモンゴル人の嫌悪感が沁みこまれるようになった。ヒタドという言葉，つまり記号には，代表性がある。その代表性を探れば，特徴は数多く挙げられ，その地域の人しか理解できない可能性がある。ヒタドは単純にイコール漢人ではない。

4.2　旧出稼ぎヒタド

ウーシン旗に来た農民は，春に種を蒔き，秋の収穫が終わったら故郷の陝西省に戻る。現地のモンゴル人との関わりは少なかった。時間が経つにつれ，農民は季節による移動をやめ，現地のウーシン旗に定住し始めた。しかしモンゴル人と一つの村を作って，共同生活することがなく，お互いには距離があった。ヒタド農民に土地を取られたモンゴル人は，少しずつ北に移動し，新しく放牧できる土地を探した。こうした居住の形態のもとでは，ヒタド農民はモンゴル遊牧民に文化的に影響を与える機会が少なかったと考えられる。

実際モンゴル人と漢人との関わりをもたらした人々は，モンゴル人の住む地域を歩き回って，仕事を探す漢人の人々であった。彼らには，単なる仕事探しを目的にした漢人がいれば，モンゴル人の特産品を買い取りに来る漢人商人もいた。仕事探しに来た漢人は，モンゴル人の家一軒一軒を歩き回り，「エセゲイ」と呼ばれる羊毛から作るフェルトの仕事をもらう。「エセゲイ」はモンゴル人遊牧民の日常品であるが，丁寧に作られた白い上品の「エセゲイ」が遊牧民の家の大事な財産となり，飾りにもなる。モンゴル人は，彼らエセゲイ職人のことを「エグルゲ，ベン，エグルセン，ヒタド」と呼んでいた。つまり，布団を背負った漢人の意味である。エセゲイ職人は，仕事をくれた家に泊まるが，使う布団を自分で用意するのが一般的であった。

当時，ウーシン旗において羊の数はヤギの数より少なかった。それは，羊は世話をしにくく，病気に弱い，手がかかるからである。当時，腸の中の寄生虫で群れごと羊が死ぬこともあった。何らかの装置でもって羊を世話する力がなかった。しかし，モンゴル人にとって，羊は欠かせない存在だったため，どの家も羊を飼っていた。結婚式に贈り物として丸ごと羊の肉が使われたり，羊や子羊の皮で衣装を作られたりするので，羊を飼うことがやめられなかった。羊に比べて，ヤギは育てやすかった一面と，生命力がよく，繁殖も早いなどから数的に羊より多かった。少ない羊から取れる羊毛の生産量も少なかった。一年間春と秋にわけて，羊毛を刈り取る。春の羊毛を漢人商人に売り，漢人商人から布と団茶とタバコを買い，物物交換を行っていた。漢人の商人は，刈り取る人まで連れてきて，刈り取りが終わったら都会に持っていって高価で売る。秋の羊毛は，漢人に売れずエセゲイを作るのが一般的だった，という。

民間レベルでの，漢人とモンゴル人の出会いは，こうした布団を背負った漢人や漢人商人，部屋つくりの漢人らによってもたらされた。当時の漢人とモンゴル人の間のコミュニケーションは，漢人の片言のモンゴル語によるものであった。一軒家に留まる時間は，エセゲイの注文により異なり，二日間から半月までかかる場合があり，漢人のモンゴル語はますます上達した。

4.3　新出稼ぎヒタド

一九八〇年代から遊牧民は羊毛を業者に売り，大事な収入源にしている。羊毛を一年一回しか刈り取りしない。品種改良が行われ，羊毛の生産がよくなり，医療の発展に伴って死ぬ羊も少なくなった。エセゲイを作るエセゲイ職人と羊毛商人がいなくなり，エセゲイ作らせる人もいなくなった。遊牧民も，工場で作られ

た絨毯を買うようになった。以前使われていたエセゲイは姿を消しつつある。

新しい歩き回るヒタドが現れた。彼らは，レグンヒタドである。つまり出稼ぎヒタドで，仕事を探しに来ている人たちである。だが，彼らも毎年減りつつある。町での建築の仕事や交通道路の修理などの仕事に就くため，収入が高く仕事見つかりやすいためである。それに，一日五〇元から八〇元という高い給料を要求するので，遊牧民には払えないのである。

社会が発展し，様々な変化があった。モンゴル人の住む地域に訪れてくる漢人の数は変わってないが，漢人には大きな変化が現れた。漢人のモンゴル語の会話力が変わった。以前は，コミュニケーションはモンゴル語によって行われていた。挨拶，出身地，数字，お茶を飲む，ご飯を食べるなどから，お金の交渉まで，モンゴル語によって行われていた。しかし，現在では逆転して，モンゴル人のほうが漢語を話すようになった。その理由は，頻繁に来る漢人人口が多くなり，付き合いが長くなったからである。新しくきた若い漢人はモンゴル語がわからないため，モンゴル人は漢語を話せざるを得なくなった。

4.4　「ヒタド苦手」文化

李はヒタドである。エセゲイを作って働いていた旧出稼ぎの人でもあって，農業や牧業を手伝う仕事をする新出稼ぎの人でもある。悪質な漢人ではないとA夫婦はいう。李は時々自分を指してモンゴル語で「マゴウヒタド」（悪い漢人）と言う。

李は最初内モンゴルにきた理由を，内モンゴルが陝西省より裕福だからと言う。少年時代の李は泣き虫で，まともに勉強できなかったため読み書きができない。内モンゴルに出稼ぎに行っていたが，兄のように内モンゴルへの戸籍移転ができなかった。家が貧乏で結婚ができなく，子供もない。甥を養子にもらって，内モンゴルに来て何年もたっている。近所のモンゴル人には，表で「李さん」と呼ばれ，裏で「ばかヒタド」とからかわれたりする。しかし，うそをつかない，盗まない，怠けたりしない漢人であるとも言われている。二〇〇五年からは，モンゴル人A夫婦のところに出稼ぎに行っているのである。

李とA夫婦は異なる言語と文化を持っていて，同じ部屋に住んでいる。文化による価値観の違いによって，摩擦が生じる。家畜を乱暴に扱う李をモンゴル人は批判する。金銭的に李はしっかりもので，給料交渉で勝つ。それを，漢人は金銭的に細かく，金を貯めるばかりで使わないと思われる。李がモンゴル地域に出稼ぎに行っていたとき，モンゴル人による漢人に対する偏見のため，無礼に扱われた経験を持つ。そのため，無礼なモンゴル語を数多く知っている。実際ヒタドは，現在では豊かになっている。以前のような，みすぼらしくなく，プライドも持つようになった。だからといって，モンゴル人から尊敬される対象にはなってない。ウーシン旗にきて豊かになったヒタドに対して，モンゴル人は今でのよい状況に言及するのでなく，最初に来たころの貧しさを覚えている。いくら豊かになっても素質が変わってない，ヒタドはヒタドだと言うのである。

李はウーシン旗に来ているヒタドの一人である。モンゴル人だけが住んでいた地域がモンゴル人と漢人が一緒に住む地域になり，Aと李のように摩擦を起こしながら接触して生活している。攻め込んできている強い漢文化に対して，モンゴル文化が消滅の危機を感じ抵抗している。こうした抵抗から，「ヒタド苦手」文化が続いていると思われる。現在のウーシン旗のモンゴル文化は，長年にわたる出稼ぎヒタドによる影響で少しずつ変わり，既に新しい文化を作り出している。それは，五〇年前の伝統モンゴル文化でもない，漢人文化でもない，独特な現在のウーシン旗におけるモンゴル文化である。こうしたヒタド苦手文化がヒタドの同化を遅らせてきたのではないかと考えられる。

参考文献

楊海英，児玉香菜子　2003「中国・少数民族地域の統計をよむ―内モンゴル自治区オルドス地域を中心に」『人文論集』54－1

ウーシン旗統計局「ウーシン旗2006年国民経済統計資料」2007年　ウーシン旗統計局印刷

内蒙古自治区民委・語委　2004「新しいを作り，蒙古言語文字を発展させるための努力」内蒙古自治区民委・語委。

郑思忠　2007『聚焦绿色乌审』内モンゴル人民出版社